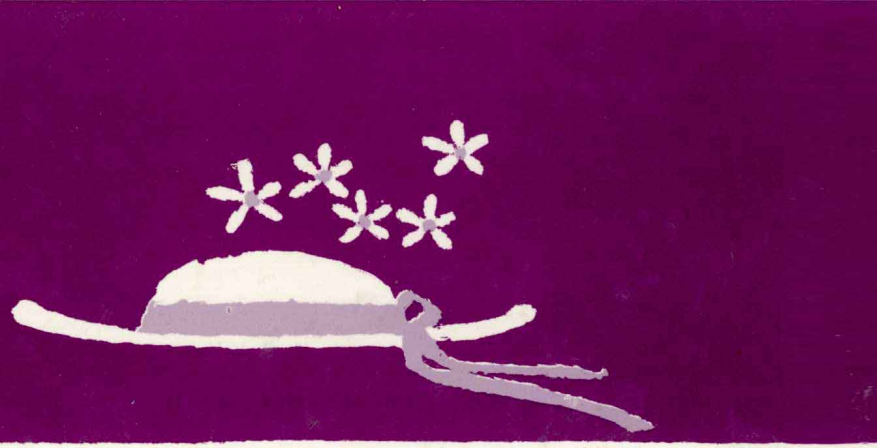


ANNE OF GREENGABLES

赤毛のアンシリーズ1

赤毛のアン

モンゴメリー作
村 岡 花 子 訳

講談社

933 モンゴメリー，ルーシー　モード
赤毛のアンシリーズ　1　村岡花子訳

講談社　1973
334p　18cm

内容：1　赤毛のアン
（原書名）“Anne of Green Gables”

Montgomery, Lucy Maud
むらおか はなこ

赤毛(あかげ)のアン

昭和48年10月20日　第1刷
昭和51年　第5刷（F）
訳　者　村岡花子(むらおかはなこ)
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話　東京（03）945-1111（大代表）
振替　東京 8—3930
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社

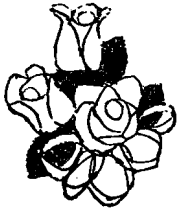
©Midori Muraoka　1973　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。
定価は箱に表示してあります。

赤毛のアン

Anne of Green Gables

もくじ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

第一章　レイチェル＝リンド夫人のおどろき……7
第二章　マシュウ＝クスバートのおどろき……16
第三章　マリラ＝クスバートのおどろき……32
第四章　グリンゲイブルスの朝……41
第五章　アンの身のうえ……48
第六章　マリラの決心……55
第七章　アンのおいのり……62
第八章　アンの教育……67
第九章　レイチェル＝リンド夫人あきれかえる……76
第十章　アンのおわび……86
第十一章　アン日曜学校へ行く……97
第十二章　おごそかな誓い……104
第十三章　待ちこがれるピクニック……112
第十四章　アンの告白……117
第十五章　教室異変……129

第十六章　ティーパーティーの悲劇……145
第十七章　新しい刺激……158
第十八章　アンの看護婦……164
第十九章　音楽会と災難と告白……175
第二十章　行きすぎた想像力……189
第二十一章　香料ちがい……195
第二十二章　アンお茶にまねかれる……206
第二十三章　アンの名誉をかけた事件……211
第二十四章　音楽会……218
第二十五章　マシュウとふくらんだそで……222
第二十六章　物語クラブの結成……234
第二十七章　虚栄のはて……242
第二十八章　たゆとう小船の白ゆり姫……250
第二十九章　わすれられないひとこま……260
第三十章　クイーン学院の受験……269

第三十一章　二つの流れの合うところ……282
第三十二章　合格者発表……289
第三十三章　ホテルの音楽会……298
第三十四章　クイーンの女学生……308
第三十五章　クイーン学院の冬……316
第三十六章　栄光と夢……319
第三十七章　死のおとずれ……325
第三十八章　道のまがりかど……328

装本・口絵・さし絵　鈴木義治

赤毛のアン

はじめに

村岡花子

この本は，これからつづく「赤毛のアンシリーズ」の最初の１さつです。

孤児院から，マシュウとマリラというきょうだいの家にひきとられてきたアンという少女の，11歳から16歳ぐらいまでのことが，この第１巻に書いてあります。

ひきとられてきたといっても，まちがいで来たのです。マシュウとマリラは，ひとりもので，年をとってきて，だんだん畑仕事も骨が折れるようになったので，孤児院から男の子をもらおうと思ったのが，どうした行きちがいか，アンという女の子が来てしまったのです。

これから，このシリーズのきばつな物語がはじまります。

第一章　レイチェル＝リンド夫人のおどろき

アボンリー街道をだらだら下っていくと、小さなくぼ地に出る。レイチェル＝リンド夫人は、ここに住んでいた。

まわりには、ハンノキがしげり、ずっとおくのほうのクスバート家の森から流れてくる小川が横ぎっていた。森のおくの上流のほうには、思いがけないふちや、たきなどがあって、かなりの急流だそうだが、リンド家のくぼ地に出るころには、流れのしずかな小川となっていた。

それというのも、レイチェル夫人の家の前を通るときには、川の流れでさえ、行儀作法に気をつけないわけにはいかないからである。

レイチェル夫人は、まどぎわにすわり、無心の小川から子どもにいたるまで、通るものすべてに、するどい見はりの目を光らせていて、すこしでもわからないことや、ふつごうなところを見つけたが最後、その理由を、根ほり葉ほりさぐり出さずにはおかないということを、川の流れのほうでもわきまえていたのかもしれない。

自分のことはそっちのけにして他人のせわばかりやいているものは、アボンリーだけでなく、どこにもたくさんいるが、レイチェル夫人は、自分のことはすっかりやったうえに、他人のせわまでやくだけの腕まえをもっていた。

家事のきりもりはじょうずだし、裁縫奉仕のあつまりの中心になっているし、そのうえ、日曜学校の仕事から婦人外国伝道後援会のたいせつな役までするといったぐあいでありながら、なお、何時間でも台所のまど下にすわって、もめんのさしこのふとんを編むだけの余裕があった。

「十六まいもつくったんだとさ。」と、アボンリーの主

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

婦たちは、声をひそめて話しあうのだった。しかも、その間じゅう、このくぼ地からずっとむこうの赤土の丘までうねうねとつづいている街道に、たえず目をくばりながらの仕事だから、おどろきいったものである。

アボンリーは、セントローレンス湾につき出た三角形の小さな半島で、両側を水にかこまれているので、ここからは、出ていくものも、はいってくるものも、かならず、この丘の道をこえなくてはならなかった。したがって、しょせん、レイチェル夫人のぬけめのない見はりをのがれることはできなかった。

ある六月のはじめの午後、レイチェル夫人は、いつものようにすわっていた。まどからは日がさんさんとさしこみ、坂の下の果樹園には、うすもも色の花がいちめんにさきひろがり、その上をたくさんのミツバチが、ブンブンうなりまわっていた。

アボンリーの人たちから「レイチェル＝リンドのご亭主」とよばれているトマス＝リンドは、おとなしい、小がらな男で、納屋のむこうの丘の畑で、カブをまいていた。

マシュウ＝クスバートは、グリンゲイブルス（緑の切妻屋根）のむこうの広い畑のカブをまいてしまったようすだ。前の日の夕がた、マシュウが、カーモディのウィリアムの店で、ピーター＝モリソンにむかって、あすの昼すぎにまくつもりだと話しているのを、レイチェル夫人は、ちゃんと聞いていたのだからまちがいはない。

それだのに、そのいそがしいはずのこの日の午後三時半という時間に、マシュウが、ゆうゆうと、くぼ地をぬけて丘をあがっていくのだ。白いカラーと、とっときの外出着を着こんでいるところを見ると、どこか、よそへ行くことはまちがいないようだ。

しかも、くり毛のウマをつけた馬車を走らせているのだから、かなり遠くへ行くにちがいない。いったい、どこへ、なんのために行くのだろう。

これが、ほかの男だったら、レイチェル夫人は、あれこれと考えあわせて、たいてい、うまくあててしまうのだったが、マシュウときたら、めったに家をはなれない

うえに、ごく内気で、知らない人をたずねたり、口をきかなくてはならないところへは、いっさい顔を出そうとしない男だから、まるっきり見当がつかなかった。

「これはきっと、なにか、きゅうにかわったことでもおこったにちがいない。」

レイチェル夫人は、さんざん考えたあげくにつぶやいた。

「お茶のあとで、グリンゲイブルスへひと走りして、マシュウがどこへ出かけたのか、なんのために行ったのか、マリラから聞き出してこよう。

ふつう、いまじぶん町へ行くことはないし、人をたずねるなんてことは、けっしてしない人だし、もし、カブの種がたりなくて買い出しに行くのなら、あんなにめかしこんで馬車をひっぱっていくはずがないし、お医者さまをむかえに行くにしてはいそいでいるようすもなかったし。

だが、ああして出かけていくからには、なにかおこったにちがいない。すっかり、わけがわからなくなってしまったよ、まったくのところ。

なんできょう、マシュウがアボンリーから出かけていくのかわかるまでは、いっときだって、じっとしていられやしない。」

そこで、お茶がすむと、レイチェル夫人は出かけた。道のりはたいしたことはなく、リンド家のくぼ地から街道づたいに行けば、半マイルのまた半分ぐらいで、クスバート家につくが、長い小道があるので、かなりたいくつだった。

むすこにおとらず内気で無口なマシュウの父は、森の中へでもひっこみたいところを、その一歩てまえのところに、屋敷をたてた。

こうして、グリンゲイブルスの家は、開墾地のはずれにいまでもたっているので、アボンリーの家々がなかよくならんでいる街道からは、ほとんど見えなかった。

レイチェル夫人の考えでは、そんなおくまったところにいたのでは、住むという意味をなさないのだった。

「ただ、そこにいるってだけのものさ、まったくのとこ

ろ。」

車のわだちのあとが深くついているノバラの小道を歩きながら、かの女はいった。

「こんなところに、自分たちだけでくらしているのだもの、マシュウもマリラも、かわったきょうだいさね。木じゃ話し相手にゃならないのに、木でよかったらいやというほどあるけれどね。わたしなら人間のほうがいいな。とにかく、あの人たちは満足しきってるんだよ。なれちまったせいさね。アイルランド人のいいぐさじゃないが、なれれば首をしめられることだって平気になるというからね。」

こういいおわったときには、小道はつきて、グリンゲイブルスのうら庭へ来ていた。

うら庭は青々として、きちんとかたづき、棒きれ一本石ころひとつ見あたらなかった。

マリラ＝クスバートは家の中をはき出すのと同じくらい何回も、このうら庭をはくにちがいないとレイチェル夫人は、心の中で考えた。土の上に食事をひろげても、ちりひとつつけずに食べられるだろうと思われるほどきれいだった。

台所の戸を強くたたくと、おはいりと返事があったので、レイチェル夫人は、中へはいっていった。

グリンゲイブルスの家の台所は、居ごこちよくつくってあったが、あまりきちんとかたづきすぎているために、かえって、ふだん使っていない客間のようなよそよそしい感じがした。

東と西にまどがあるが、うら庭にむかった西側のまどからは、なごやかな六月の日光がふりそそいでいた。青青としたツタがからみついた東のまどをのぞくと、白いサクラの花がまっさかりの果樹園や、小川のほとりのくぼ地のほっそりしたカバが頭をうなずかせているのが見えた。

まぶしい日光をきらうマリラは、すわるときには、いつもここと決めていた。いまも、編み物をしながらすわっており、うしろの食卓には夕食のしたくがしてあった。

ドアをあけたとたんに、レイチェル夫人は、もう、食

卓の上のものを、みんな見てとってしまった。さらが三まいある。すると、マシュウがだれかをつれてお茶に帰ってくるのを、マリラは待っているにちがいない。だが、料理は、ふだんのものだし、お菓子も、野生リンゴのさとうづけだけしか出ていないところを見ると、とくべつたいせつな客というわけでもないらしい。

とすると、マシュウの白いカラーとくり毛のウマは、どうしたわけだろう。

しずかで、いつもとすこしもかわらないこの家にまつわる、ふしぎななぞは、レイチェル夫人にはどうにも解けなかった。

「今晩は、レイチェル。」

マリラは、てきぱきとあいさつした。

「まったく気持ちのいい夕がたじゃないの。おかけなさいよ。お宅じゃ、みなさんいかがですかね？」

マリラとレイチェル夫人は、気だてがちがっていたけれど、いや、ちがっていたからこそかもしれないが、あたたかい心のこもったつきあいをしていた。

マリラは、背の高い、やせた女で、まるみのない角ばったからだつきをしており、しらがの見えはじめた黒い髪を、いつも、うしろでかたくひっつめにして、二本の金のピンで、ぐさっととめていた。

見るからに、かたくるしい、ゆとりのない性質があらわれていたが、ただ、口のあたりに、なにか、もうすこしどうかしたらユーモラスなものになる、といえなくもない感じがただよっていた。

「おかげさまで、元気ですよ。だけど、もしかすると、あんたがどうかしたんじゃないかって、ちょっと心配になったんですよ。きょう、マシュウが出かけていくのを見たものでね。お医者へでも行ったんじゃないかと思ったんですよ。」

そらきた、といわんばかりに、マリラのくちびるは、おかしそうにゆがんだ。

マシュウが思いがけないときに出かけていくのを見たら、レイチェル夫人が、かならず、そのわけをさぐりにやってくるにちがいないと、マリラは、じつは、さっきから待ちかまえていたのだった。

「いいえ、きのう、ひどい頭痛がしただけで、わたしは、どこもわるかありませんよ。マシュウはね、ブライトリバーへ行ったんですよ。ノバスコシアの孤児院から小さな男の子をひとりもらおうと思ってね。今夜の汽車で来ることになっているんですよ。」

もし、マシュウがオーストラリアからのカンガルーをむかえに、ブライトリバーへ行ったのだとマリラが話したとしても、レイチェル夫人は、こんなにおどろきはしなかっただろう。五秒間というものは、文字どおり口がきけなかった。

「あんた、本気でいってるの、マリラ？」

ようやく口がきけるようになると、レイチェル夫人はたずねた。

「もちろんですよ。」といったマリラの口ぶりは、孤児院から男の子をもらいうけることなど、たいしてびっくりするほどのことではないと、いいたてているようだった。

レイチェル夫人は、ひどいショックを受けた。男の子とはまあ！　人もあろうに、マリラとマシュウが、男の子をひきとるとは！　孤児院からだって！　これがおどろかずにいられるなら、ほかに、なにもおどろくことなんかありっこない！

「いったいぜんたい、どうして、そんなことを考えだしたものかね。」と、レイチェル夫人は、承知しかねるようすでいった。このことが自分に相談なしでおこなわれたので、不満だったのだ。

「そう、これについちゃあ、わたしらは、冬じゅう考えてたんですよ。」

マリラは答えた。

「クリスマスの前のころ、アレキサンダー＝スペンサーのおくさんが見えて、春になったら、ホープタウンの孤児院から、女の子をひとりもらってくるつもりだって、いいなすったんですよ。

それからってものは、マシュウもわたしも、そのことばかり話しあってね。男の子をひとりもらおうってことにしたんですよ。

マシュウも年をとってきたし――もう六十ですからね――。で、以前みたいには、からだはきかず、心臓の持病にゃくるしめられるし、それに、あんたも知ってのとおり、人をやとうのは、おっそろしくめんどうになってきてるしね。

あれこれ考えたすえ、スペンサーのおくさんが女の子をひきとりに行きなさるとき、わたしらにもひとり選んでくださるようにたのんでみようということに相談が決まってね。先週、いよいよ、おくさんが行きなさるって聞いたもんで、カーモディのリチャード＝スペンサーの衆にことづけして、年ごろは十か十一ぐらいの、りこうな男の子をつれてきてくださいってたのんだんですよ。

それくらいになってりゃ、すぐ、なにかと役にはたつだろうし、まだまだ、じゅうぶんしつけもきくし、しこめもするから、いちばんよかろうということになったわけでね。かわいがって、ちゃんと教育もしてやるつもりですよ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo